

らいぶ **創** つくりえいたー
LIVE **創** REATOR

NO.21
2004.10.1

研究広報誌

CONTENTS

「意味と内容」が
ひろがる学びの創造
まなざしの共有によって

- 教育研究発表会のご案内 1・2・3
- 学習紹介 「生き物たんけんたい」(3B理科) 4
- 学習紹介 「あなたの足にぴったりサイズのくつは？」(4B算数) 5
- 学習紹介 「短歌の世界へようこそ」(6C国語) 6
- 学習紹介 「高まりあえる学級 複式学級」(5・6F複式) 7
- わたしの学校 HOT LINE 「磨く」ということ「聴く」ということ 8

「意味と内容」がひろがる学びの創造
— まなざしの共有によって —

和歌山大学教育学部附属小学校



ごあいさつ

盛夏の候、先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、ご案内のように本校では来る11月19日(金)に、2004年度「教育研究発表会」を開催することになりました。

本年度のテーマは —「意味と内容」がひろがる学びの創造— です。

本校の教員は文字どおり、子どもたち一人ひとりが〈豊かな学力〉と共に、創造性豊かな心を育むことができるよう願いを込めながら、日々、研鑽に努めております。

ぜひご参会くださいまして、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

学校長 矢萩 喜孝

期 日 平成16年11月19日(金)

日 程	8:15	8:40	8:55	9:00	9:45	10:00	10:45	11:00	12:30	14:00	15:00	16:30
受付		朝の会	移動	研究授業 I	移動	研究授業 II	移動	協議会	昼食	概要発表 (学校提案)		講演会

■研究授業Ⅰ（9：00～9：45）

教科/学級	単元名/授業テーマ	授業者/場所
みらい [1年C組]	「あそびめいじん」 かかわり合う力を育むみらいの学習	辻本 郁夫 [1C教室]
図工 [2年A組]	「さわって かわって」 子どもの世界がひろがる素材・題材の研究	竹中 恵美子 [ピロティ前]
音楽 [2年C組]	「いい音さがして」 ポルカのリズムを見て、聴いて、力を合わせて表現する	土橋 由美 [第2音楽室]
社会 [3年A組]	「わが町のはたらく人たち」 ひとり学習を進めていく力となるまなざしの共有	山崎 立也 [3A教室]
国語 [3年C組]	「物語の世界へ モチモチの木」 物語の世界をひろげるための五感を大切に、比較を追求する	竹光 眞佐人 [3C教室]
算数 [4年B組]	「分数」 子どもの問いからはじまる「意味と内容」のひろがり	梅本 優子 [4B教室]
家庭 [5年A組]	「わが家のふれあいづくり」 家族の一員として家庭生活にはたらきかける学習	藤原 ゆうこ [5A教室]
体育 [5年B組]	「ソフトバレーボール」 “つなぐ”ことを楽しむバレーボール	石本 倫章 [体育館]
理科 [5年C組]	「おもりが動くとき」 課題選択単元における子どもが納得する「感動」	辻本 和孝 [理科室]
理科 [6年A組]	「大地は語る」 感動体験を通して、理科が好きになる子どもを育てる	不野 和哉 [6A教室]
国語 [6年C組]	「生き方について考える『海の命』」 比較を通して、ものの見方や考え方を育てる	志場 俊之 [6C教室]
算数 [5・6F]	「5年『面積』・6年『体積』」 個人の思考をみんなでわかりあえる複式の授業のあり方	岡田 明彦 [5・6F教室]

■研究授業Ⅱ（10：00～10：45）

教科/学級	単元名/授業テーマ	授業者/場所
算数 [1年A組]	「ひきざん(2)」 子どもの考えを生かした「意味と内容」のひろがり	池田 彦男 [1A教室]
図工 [1年B組]	「パスのひみつ」 題材に深く関わり、「もっと」「次は」と挑戦していく学習	北山 成美 [1B教室]
国語 [2年B組]	「お手紙」 伝え合う力を育むため、子どもの認識が深まる比較の視点を探る	須佐 宏 [2B教室]
理科 [3年B組]	「発見！ じしゃくの ひ・み・つ」 見えない世界をさぐる楽しさから生まれる感動	中筋 美恵 [3B教室]
社会 [4年A組]	「伝統の業(わざ)」 追究を高めるための、まなざしの共有とひとり学習	片桐 宏 [4A教室]
理科 [4年C組]	「温度とものの変化」 大単元構成における子どもの「感動」の連続が深める学び	中井 章博 [理科室]
算数 [5年A組]	「式と計算」 子どものはたらきかけが教科書教材の「意味と内容」をひろげる	愛須 一弘 [5A教室]
国語 [5年C組]	「地球環境について考えよう」 話し合いを通して互いの考えを比較し、「意味と内容」をひろげる	沖 香寿美 [5C教室]
社会 [6年B組]	「紀州徳川家八代將軍吉宗」 個に応じたひとり学習の追求のあり方	田中 いずみ [6B教室]
音楽 [6年C組]	「私のお薦め30曲！」 小中連携を見据えて、子どもの音楽観の拡大をはかる	江田 司 [第1音楽室]
みらい [1・2F]	「のりものたんけんたい ～施設や人をとりあげて～」 異学年のかかわりを生かしながら、まなざしを共感する授業	松尾 浩一 [1・2F教室]
国語 [3・4F]	「情景を想像しながら読もう 3年『モチモチの木』・4年『ごんぎつね』」 子どものまなざしの共有を最大限に生かす同時間接指導の工夫	西村 充司 [3・4F教室]

■各協議会（11：00～12：30）

教科・場所	テ ー マ	助 言 者
国 語 [6年C組]	比較を通して、楽しく学び合い、伝え合う力を高める	津田 修吾 (下神野小学校校長) 武西 良和 (有功東小学校校長)
社 会 [3年A組]	ひとり学習の充実からまなざしの共有へ	片桐 清司 (前有功東小学校校長) 川本 治雄 (和歌山大学)
算 数 [4年B組]	子どもがつなげる算数科学習 － 思考の相互作用によって「意味と内容」をひろげる －	山崎 光弘 (城北小学校校長) 佐藤 昌吾 (橋本市教育委員会)
理 科 [6年A組]	「感動」体験を通して、主体的に学習する子どもを育てる － 「感動」の連続からのアプローチ－	中原 徹 (松江小学校校長) 宮永 健史 (和歌山大学)
音 楽 [第1音楽室]	「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習 → 「まなざしの共有」を軸に、小・中を通じた学びのひろがりを考える －	嶋田 由美 (和歌山大学) 菅 道子 (和歌山大学)
図 工 [2年A組]	自分らしいよさや可能性を發揮し、つくり出す喜びを味わう	堀 憲子 (小倉小学校校長) 永守 基樹 (和歌山大学)
家 庭 [5年A組]	自らの生活を実感し、工夫する楽しさに気付く家庭科学習 － 家庭生活にはたらきかけることによってひろがる「意味と内容」－	坂本記美子 (雄湊小学校校長) 細谷 圭助 (和歌山大学)
体 育 [5年C組]	「わたし」と「運動」の関係を創る － 競争からひろがる「意味と内容」－	宮崎 弘志 (本町小学校校長) 三上 滋樹 (今福小学校校長)
複 式 [ワークルーム]	自ら問題意識をもち、「かかわり」を深めながら、まなざしを共有する子どもを育てる	土岐 明輝 (那賀地方教育事務所)
み ら い [1年C組]	主体的な「かかわり」による学びの創造	松浦 善満 (和歌山大学)

■学校提案（14：10～14：40）

「意味と内容」がひろがる学びの創造

—— まなざしの共有によって ——

研究企画長 愛須 一弘

■講 演（15：00～16：30）

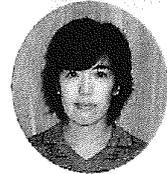


「疾風怒濤時代を生きる。」

ねごろ やすちか
根來 泰周 先生
(日本プロ野球コミッショナー)

3年B組の
理科

生き物たんけんたい
～むしむしワールド～



担任 中筋 美恵

本年度の理科部のテーマは『感動』体験を通して、主体的に学習する子どもを育てる理科学習です。理科の学習に初めて取り組む3年生では、子どもたちの「なぜだろう」「ふしぎだな」と感じる心を大切に、事象との出会い、そして「なるほどわかったぞ！」という納得できる楽しさを味わうことができるように学習を進めていきたいと考えています。

本校の敷地内は自然がいっぱい、虫いっぱい！虫を捕まえたり飼ったりすることが大好きな子どもたちと、モンシロチョウ・アゲハチョウの観察を中心に学習をすすめました。じっくりとみることはもちろん、それぞれの成長の段階においての変化を、自分なりの根拠を持って予想し、話し合うことに取り組みました。

・・・ある日の授業より・・・



アゲハチョウ

さなぎはこのあとどうなるのだろうか

本時の目標

- ・ アゲハチョウ・モンシロチョウの羽化の様子を予想し、根拠を持ってつたえることができる。
- ・ チョウの成長を今までの様子やその他の経験と比べながらみることができる。

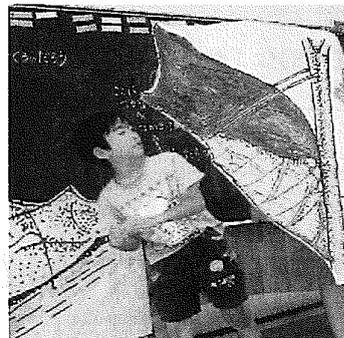


モンシロチョウ

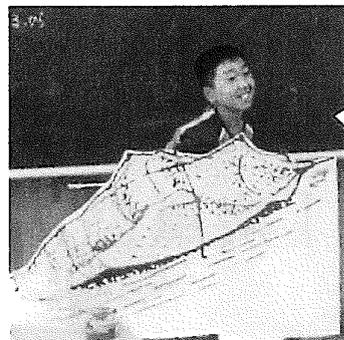
チョウはどこからでてくるのだろうか？

さなぎをよく見ると、はねがみえてる。この部分のはねだから、おなかやぶれて、トコトコって歩いていくと思う。

でも、それだったら、糸が切れたり、この糸がじゃまになると思うよ。



セミは、背中からバリバリって出てきてしがみついてはねをかわかすよ。抜け殻も見たことがある。だから、きっとチョウも同じだと思う。



このあたりから頭をだすと思うよ。そしてはねをだして、飛ぶ練習を始めると思う。

このあと、育てていたチョウの羽化の様子をビデオでみました。するするっとさなぎから出てくる姿に驚きながら、「どうして頭のほうから出てくるんだろう。」「ほかの虫はどうなっているんだろう。」「さなぎが高いところにあるのはなぜ。」といった疑問を見つけ、話し合いました。子どもたちは、このような話し合いの中で、昆虫に対する見方や考え方をひろげていくことができたのではないかと考えています。

あなたの足にぴったりのサイズのくつは…?

— 「小数」の学習より —



算数科
4年B組
担任 梅本 優子

単位量に満たない『はした』の数量を表すのに、分数や小数があります。なかでも小数は、整数と同じ『十進構造』のため、日常生活のなかで頻繁に使われ、子どもたちにも馴染みです。50メートル走の記録・マラソンの距離・ジュース等の商品の量表示 etc……。そのため、小数の学習の導入は、いろいろな場面が想定され、教材研究も楽しいですね。

今回は、子どもたちにとって最も身近で、興味深い素材と思われる“上ばきのサイズ”を題材とした導入時の学習を紹介させていただきます。

ステージ① 足型をとろう!

- ・わたしのサイズは、22 cmよ
 - ・ぼくは23 cmだけど、ちょっと足型が小さく見える?
- ⇒正しく、きっちり足型をとろう。

正しい
測定に
着目!

ステージ② 小さいサイズの順から並べてみると……

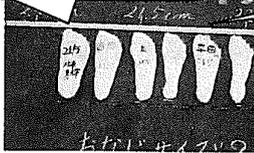
- ・ではでは21 cmのわたしから
 - ・次は22 cm, 23 cmの人どうぞ
 - ・まって! 21.5 cmのぼくは?
 - ・21.5 cmはどこに貼るの?
 - ・21 cmと22 cmの“間”だよ!
 - ・(. 5) だから真ん中だ!
- ⇒『21.5』のような数を小数というんだ。じゃ、みんな自分のサイズのところに足型をはろう!

ステージ③ よく見ると、変だよ……

- ・ぼくたち同じ『21.5 cm』のサイズなのに、どうしてピヨウに大きさが違うのかな?
 - ・だって、ぼくの上ばきちょっときついよ……
 - ・わたしは少し大きめの上ばきだもの……
 - ・足型をきちんと測りなおさなくっちゃ!
- ⇒(. 5) だけじゃぴったりサイズは無理!

あらっ! あなたも21.5 cm? おかしい……

4Bの子どもたちが、もっとくわしく測ってくれるわよ

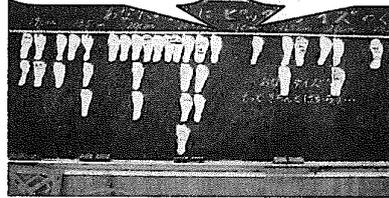


“1”の間をもっと細かく分ける必要性あり?

ステージ④ なるほど! 『小数』

わたしは20.8 cmですって

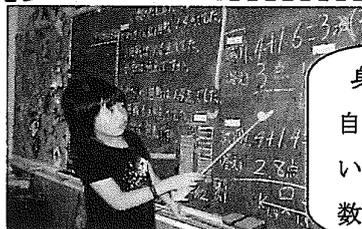
ぼくは21.2 cmだったよ
小数って便利だね……



- ・ぼくのサイズは『21 cm 2 mm』だから、小数でいうと、『21.2 cm』だね!
- ・小数は、“1”を10個に分けた1つ分を“0.1”として、0.1がいくつ分で表せるんだ!!

もっとくわしく小数について考えよう!!

小数の意味を獲得した子どもたちは、この後、『じゃんけんゲーム・ジュースをゲット!』『小数陣取り・問題づくり』の活動を通して、小数の大小関係や計算等について学習を進めていきました。



身近な題材から子どもたちが自分の問いを見出し、共有し合い、自分たちでつなげていく算数学習に取り組んでいきます!

短歌の世界へ ようこそ

「死にたまふ母」(「みちのくのー」を含む 59 首)を通して

6C 担任 志場 俊之

近年、遊びの変化から百人一首などの短歌に親しむ機会が減っている。文語に親しむことが極めて少ない子どもたちである。しかしながら、短歌や俳句の5音7音という日本独特のリズムについては、生活の中で、交通安全標語やことわざなどの形で出合う機会も多く、身近に感じてくれることであろう。

ここでは、数多くの短歌や俳句を読み味わうことで、日本の文化への関心を深めるとともに、言葉の持つ象徴性についても触れさせたいと考えた。



少し難しい内容ではあるが、斎藤茂吉の「死にたまふ母」を取り上げて学習を進めていった。教科書に載っている「みちのくの 母のいのちを 一目見ん 一目みんとぞ ただにいそげる」は、連作「死にたまふ母」59首の中の3番目の短歌である。教科書のように、「みちのくのー」という短歌一首だけを取り上げての学習では、その短歌自体は読み味わうことができても、そのまわりにあるもの、例えば茂吉の細かな心情変化、季節、時間、場所、場面、情景など、茂吉の見たもの、感じたこと、思ったことには出合うことができない。

59首を読みながら第3首に目を向けると、「母のいのち」という言葉がクローズアップされてくる。「母の様子を一目見ん」でもなく「母の姿を一目見ん」でもない。「母のいのちを一目見ん」でなければならない理由がこの59首には詰まっている。

また、59歳でなくなった母の年齢に合わせて59首を詠んでいることから、母との思い出を大切にしようという茂吉の思いが読み取れる。

そこで、この59首の連作を、茂吉の母を思う物語として捉え、物語の主人公の心情変化を追うことで、その中にある「みちのくのー」の読み取りにも広がりを持たせ、それぞれの短歌の奥の深さやその短歌一つ一つに込められた作者の心情や表現の仕方、言葉の選び方を理解させようと考えたのである。

そういう学習を体験することで、一つ一つの作品が何をどのように見て、そしてどう考えて生み出されたのかという味わい方もできる。また、作者や主人公のまなざしに目を向け視点を寄り添わせようとする読みの姿勢が生まれてくるとともに、作者の感動や思いを共有しようという姿勢もまた生まれてくるものと考えている。

そういう学習の広がりが、作者や短歌、俳句への親しみとなり、進んで他の作品をも読み味わおうとする態度へと発展していくことが期待できると考え、この単元を設定した。

難しい言葉の数々に、はじめは意味も分からない子どもも多くいたが、何首か読むことのできる短歌を見つけ、その間を想像したり、辞書で言葉を調べたりしながら、病床の母を思い遠くから会いに来て、母の死に直面し、その母を焼き、骨を拾う茂吉の行動・心情・情景を知ることができた。一つ一つの短歌から、茂吉の思いや行動を理解しながら、文語表現にも関心を持ち慣れ親しむことができたし、短歌の連作を一つの物語として読み深め、茂吉の思いに迫ることができた。

高まりあえる学級 複式学級

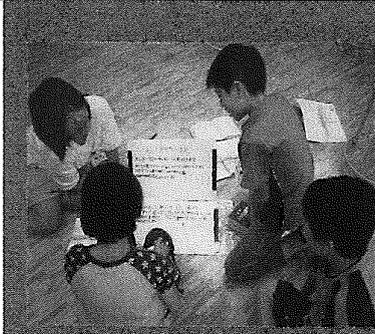


5・6年複式学級 担任 岡田明彦

複式学級の学び

今年で2年目の複式学級担任。5年生6人、6年生6人、あわせて12人、二十四の瞳の子どもたち。毎日のがんばりに驚かされます。

- ◎子どもたちは自分の考えをどんどん発表していきます。もちろん苦手な子もありますが、自分で考え、それを同じ学年の友だちや上学年、または下学年の子に伝えようとします。
- ◎子どもたちが自分たちで学習を進め、学習課題を解決していきます。自分の考えを整理して書き発表します。友だちの発表にたいしては、自分の意見を言おうと努めます。
- ◎上学年が下学年を引っ張っていきます。下学年は上学年をまねようとします。影響しあい、刺激しあった学びが展開されます。



複式学級では、少人数であるということから、子ども一人ひとりが学級内で果たす役割が大きくなります。自分の考えや思いを伝える機会が多くなり、一人ひとりに時間を十分確保することができます。それだけ、考えたり、やってみたりして自分を発揮できる時間や機会が多いということです。このような少人数であるということの利点を生かし、学級内に一人ひとりが十分活躍できる場をつくり、一人ひとりの考え方や活動を学級全体で認め合う集団づくりを目指しています。

少人数

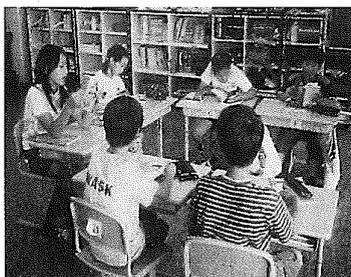
異学年

複式学級の特性を生かして

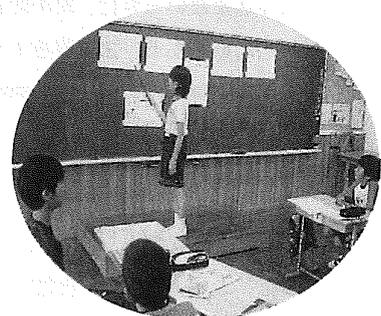
5・6Fは2学年で構成される学級です。6年生は5年生を意識し、学級の中で良きリーダーになり上学年としての自覚が育ち、5年生や複式全体の手本となり、学習を深める雰囲気をつくるようになります。下学年の5年生は、学級での生活や学習の進め方について、6年生の姿を見たり直接6年生に教わったりすることで、上学年になったとき「あんなふうにならなければいけないんだな。」「あんなふうになりたいな。」と思うようになります。このように、学級の中でお互いが、よい影響をうけあったり刺激し合ったりして、うまく機能していく学級でありたいと思います。



算数科学習で思考力を高める



5・6Fでは算数科での学年別指導（直接指導・間接指導を取り入れた授業）の授業を通して、子どもの思考力を高めていこうと考えています。むずかしい問題にぶつかったとき、真剣に考えて解決しようとする。解決の糸口を見つけたり、気づきや再確認ができたような話し合い活動が同学年の中で、また異学年の交流でできるように授業づくりを進めています。



“磨く”ということ “聴く”ということ

江田 司



今年「学校ピカピカ応援団（通称：学ピカ）」が発足しました。来年の10月で15周年を迎える立派な校舎ですが、やはり至る所、少しくすんできています。たくさんの方々が訪れる附属小学校。人の集う所はきれいでありたいし、きれいなところに人は来るものです。そこで、毎週火曜日の6時間目、5・6年生ボランティア24人が集合します。まず校舎内で日頃気が付かない所や、手が届きにくい掃除場所を探すのです。マイモップ、マイ化学スポンジ（みがき君）、マイバケツ、マイチリトリなど、自分専用のお掃除グッズを駆使して「ピカピカ」にする活動をはじめます。「附小の子＝お掃除嫌い・お掃除苦手!？」の前評判とは大違いです。“学ピカ”ボランティアたちは、45分間、腕が痛くなるまでいろんな所を磨き続けています。やはり、きれいになっていくのは「楽しい！」ようです。私も磨きながら見えてきたことがあります。豊かな自然に囲まれている分、あちらこちらに蜘蛛の巣が張っています。また、陽光をいっぱい採り入れる大きな窓には、風雨のあと運動場の砂が容赦なく吹き付けて、油断するとすぐ汚れています。床の汚れも頑固です。

【お願い】斬新なデザインの校舎ですので、幾分お掃除の手が届かないところがあります。例えば、児童玄関の吹き抜け〔採光窓〕やその枠と周辺など。子どもたちにも危険でないお掃除のいいアイデアがありましたらお教え下さい。

9月19日、〔スポレク附属2004（運動会）〕の開会式、「附属小学校校歌」は《1分間にJ＝約96の速さ》で演奏されました。これまで《J＝112》くらいの速さで演奏していましたから、テンポがかなり遅くなっていたことに気づかれた方もいると思います。

手元にある校歌の楽譜にはテンポ指定がありません。附小の活発な子どもたちに合わせて、程よいと思われる速めのテンポが決められてきたようです。ところが1番歌詞の2行目、「紀ノ川水に 映る夕月」の伴奏（和声進行）が少し複雑なのです。校歌には珍しく、4小節に10個も和音が使われています。響きを味わって歌うには、もう少し遅い方がいいと思って、これまでの校歌の楽譜を探し出して調べてみました。すると、元々指定された速さが《J＝92》であることがわかりました。1分間に《20》も速くなっていたことに驚きました。最初の楽譜に速度表示がなかったのは、あまりに遅いと削られたのかもしれませんが。

どれほどの違いがあるのかと言いますと、〔例〕軽快な“高速フェリー”と、周囲を圧する“万トン級のタンカー”の違いです。《J＝92》は、どっしりとした感じですが、歌い方が全く変わってきます。聴いた印象も“伝統ある附属小学校校歌”と、前に“伝統”という冠が付いたような感じになります。急に“伝統”が重くのしかかるのも窮屈でしょうから、今年は原曲より少しだけ速めにしました。一度、伝統の響きを味わいながらオリジナルの速さで歌えるようになってみたいものです。

◆指揮者チェリビダッケはテンポの設定について、次の言葉を残しています。「テンポは和音の変化を聴き取ることで決まる。和音の変化が大まかな曲であればテンポはいくら速くてもよい。しかし、和音変化の多い曲では注意しよう。前の和音の響きが自分の中に入り込まないうちに、次の和音を鳴らしてはいけない。テンポ決定は深く聴くことから始まる。テンポを決めるヒントは曲のどこかに必ずある。よく響きを聴くことだ。誰かが（テンポを）こうしているから、こうするというものではない。」

From Editors

「子どもの育ちで勝負できる教育」をめざして、日々、研究実践に取り組んでいます。ご意見・ご感想をお寄せくだされば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105 FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp